第十　禄児にんきよらし
懺悔して いふまとりし此の
句を詠まんとするを長娘く
猿も打し 悲然 色たちおりよりも
されきたのわ 寧 句ゆかしく
おの様をかくさすもやのわ急を

押しらす下手を下手な
なかりく
岩のさくらに行き梅ぞ旅に
先達もの枝を掛るさくら哉
まるまると半清し行に
百句を並べて
い黒熱となしぬ
東潮

獨吟

第士諸国を海を諷ふたつ
痩(ヤセ)るまのさ(サ)渡るかるや右二下風
たち月へ向右二のことあや鷸(カンコトリ)鳩
不二下風呂(ヒニ)あわけたる桜のる
秋のまも第士を初(ハツ)ましし　入日に

涼月は不二をよそにとる 鏡の衣

晴笠の晴星見し 富士の影

富士も覚 嚔を立ぐる 風佛川

新玉不二 生産や 時わたる

元禄壬申
元旦 菱志

萬はうつる 富士めて さえぞの 雪の影

富士の月 寒や 狸の 眠

不二こそ 鶴まとみのさし 雪のうちな

鶴舞や ひとしり 寛ある ちゝの床

九月も 秋のき 富士を 書付ある扇子

富士見て 命流たなや 鷦鷯

不二の風 眠る 兎の 長毛かな

富士は来其冬乃芳の運(ハコビ)に
根も洞ことさら富士おろし
不二下風詔嵐(テン)記乃辰の根雪は
山擲(ナゲ)はなのをとなりん春の紗
富士よりも　脈々し　出る小山哉
神楽乃名のまゝ白し　不二の下(スソ)
植木屋の此地涼しや　ぬしの花
髪結乃蔵のまわりや夜乃不二
富士おろし　漕乱乃　甲種の初みかな
一句書をさらりと不二門徒
菜籠にもしを　富士けを　婦　下回
らくの富士　猿よはその　清めさらかな

春風のおさまりかへし　三條女ニ

画帳や寝てまちし　ら三乃下り

鶯鳴や大名通る富士　見峰

梅し語虹の中行竹のかゝる

菊の露枕紅葉見すみ風

和了梅し乃縁やなの川　三本

風そ又麦乃たなけり君二番

空の松と梅し　見てあまりかゝ　呉峰

経乃おりひと二つ上乃一鹿

君二乃空林藤の蝉し生一莖

ちうくしと竺に乃梅しの具ぶ

冬枯や石の影(ケショウ)の花二下風

箱生苔布に榛の露たる流れ
人やりの木草薫るか二詠
涼めよや病傾城に忘るゝ草せ
精坊乃津辺の動揺せしを
昔話を為れ波に名すや
松酒に葉乃去る河の箱生の色
梅るや香印しと　うらやましを
富士苔布や片身かけしろ　寂笑
わりとくたのい
龍巌もいまくろしき石二下向
新田乃いさみをあやかしんて一足　かろし
人穴のゆくしき風の薫つるか

藤花ちる梅し の雲

清水の白印丸ら
切売もくらす

宮女光ら力やなかりの梅し

中日の日も躍(シブリ)りて秋の不二

不二荒て何処定る 一来鶯

花雲出てなかふし の雪れ

一夢て消えて果てわ不二乃色

風葉の笑て咲きわ梅し 結

富士下風一羽 かきわかれ 雑子れ

不二出背(セナカ)乃蝿の あつまれ

一家不二の 帰去や乙女 鶴

富士の草庵乃子隠して候なれ

切通霞乃花はいりこの不二の系

三ケ月の燃入れ富士の煙哉

角ぐ西不二のうかわもたきし

木枯乃笠に吹れ梅し語

不二の風寒さもさきや木の葉雪

擂木(スリコキ)や焼あら梅しの室

田子乃浦梅し塩雛かな喜れ

一盃の清水や石二の原

茶を咲く菜の花の山や富士の麓

満月や出てけて落し不二の影

富士塩雛に蝿(ハイ)も富士の休み哉

富士高く龍まの落しる所迄する

瀧名の一筋ぬけしの…れ

不二見龍の傍(カタハラ)になしひとわ

高根より富士浅(セン)間(ケン)の若宮

むかし坤く
まつりて

八尺岩豊莇し蘂く不二見んか

梢草のあつまり咲くや羽ねける

いが栗の去年に深きかぬし風

富士の風花もきよくかく通ひ来る

不二見顔(ヒタイ)にやどる月のかれ

関東ひきは富士帆まの風まち

富士の深も高きを手のこ御礼

富士の煙わするゝ事なかれや紫の杖
なき跡しのひ笠おもふやなつかしき
富士やまさへ櫻さくもの
　おしかへし　根杉
冨士下りて
　百ふうの跡も
　　拂ふし哉

陀仏のとなへさらに涙をすゝめはゝふかく
なきしへて芭蕉の落葉は
嵐の中に杉の葉をちらす嵐かな　其角
さ月十月の末東湖の食次
手向杉のみちゆきしれぬかな
　　　　ものいふ書

一桶のかもしてもさしむまの
仏つくる鬼喰りぬはと
ほるむて
東潮

ふみよりの笠や湿ん五月雨

たいあ谷の法師か古の
いまい
くるしむい
いつくと言うさ文
ならく

我と世に仏蘇ろの童さはぞんなり
挙白

薮ゝ吟か嵐と行衣は
東風の寄かかかなりしても
ゑらん
乾雪

静子付 鍛粒 蝿ゆ行く令家

西二の行金の波うぬ
東風の
痩とんとす
けさう来るよし
かく

行水はいかせあの源氏
素千

不二同行

涼しさや緑ふく風の空　以川

舟一つや風まかせて不二也けり　可聞

こゝろあふ酒の勢や不二下向　是楽

明ぼのゝ白きまゝ行し不二の若　東鵬

夏木立ころぶさまある不二へ　一楓

百千鳥もゑしらじ東根　雛和

不二の名さへ今暮の末明　海沙

不二月の眠り覚へ枯木月　柳潮

雪と月も蓋果や不二ゝ　白石

風まちる茶釜なる不二の道　赤心

草背と一葉ならぬ不二八景　巴潮

ウ
両(モロ)とての足長さと作るの　東潮

蒼(ツボミ)れしか咲く魚あたり　波邑

面(ツラ)あらし病もなかなる薬　光潮

一家のむ初午の三寸(ミキ)　春潮

中立(ナヲリ)かなし遊ぶからこかゝり　海星

大工数そこの烏帽子着かゝ　筆

元禄五申いろ上旬
大伝馬三丁メ
志村孫七